

学年進行が作業療法専攻学生の思いやり行動に及ぼす影響

The influence on prosocial behavior in conjunction with the advancement of occupational therapy students

山形 隆造 大野 宏明 土屋 景子 井上 桂子

川崎医療福祉大学

Ryuzo Yamagata, OTR, Hiroaki Oono, OTR, Keiko Tsuchiya, OTR, Keiko Inoue, OTR:
Kawasaki University of Medical Welfare

作業療法おかやま 23 : 46~54, 2013

Key Words: (思いやり行動), 教育, コミュニケーション, 社会性, 臨床実習,
(prosocial behavior), education, communication, sociality, clinical intership

2014年1月23日受理

要旨 作業療法専攻学生を対象とし、学年の進行が思いやり行動の生起に影響を及ぼすか検討した。思いやり行動を調査するために、愛他行動尺度と向社会的行動尺度を91名の学生を対象に実施した。また、思いやりの気持ちの増減についても質問紙により調査した。一年次から二年次に学年が進行することにより、両尺度ともに有意な差は認められなかった。三年次から四年次に学年が進行することによっても、有意な差は認められなかった。しかし、両学年共に、思いやりの気持ちの増加は認められた。本研究によって、臨床実習の経験とは関係なく、思いやりの気持ちが生じて、必ずしも思いやり行動に結びつかないことが示された。

The purpose of this study was to investigate whether prosocial behavior of occupational therapy students is influenced as their years of study advance. For measuring prosocial behavior, questionnaires including a self-report altruism scale and a prosocial behavior scale were conducted on 91 students. An increase or decrease in sympathy with someone experiencing trouble was also investigated by self-administered questionnaires. With advancement from the first year to the second year, no significant difference between the two scales of prosocial behavior was observed. Also, advancement from the third year to the fourth year did not significantly change with the two scales. However, most of the students recognized an increase in sympathy with corresponding advancement. As a result, the present study reveals that sympathy does not always correspond to prosocial behavior regardless of experience in clinical training in each year.

はじめに

作業療法士が最適な治療を実施するためには、医学的な知識や作業療法技術だけでなく、対象者との信頼関係を構築していくことが重要となる。対象者と適切な人間関係を築くためには、社会的スキルが必要となるが、近年の日本の若年者では低下傾向にあると言われている^{1) 2)}。また、社会的スキルよりさらに基本的な特性である共感性が、他国よりも日本の若者で低いと報告されてお

り、思いやりの低下が対人関係の希薄化につながっていると考察されている¹⁾。従って、思いやりは対人関係を構築する上の重要な因子であると考えられる。

思いやりとは自ら思いを働かせるという心の動きを示す³⁾。一般的に、対象者の思いやりの評価は、どれだけ思いやりのある行動を行うか、すなわち向社会的行動や愛他行動によって測定される。このことから、思いやりは広義では、向社会的行動もしくは愛他行動と同じ意味で用いられている³⁾。

向社会的行動とは「動機に関わらず、他者のためになるとされている行動」であり、愛他行動とは「外的な報酬を期待せず、他者のためになり、自発的・意図的になされ、自己犠牲を伴う行動」と定義されている⁴⁾。愛他行動は、向社会的行動の下位概念であり、外的報酬を目的としない、自己の損失や犠牲を伴わないという点で、研究者によっては向社会的行動と区別する場合もある^{3) 5)}。

平成18年に行われた日本作業療法士協会教育問題検討委員会による養成教育におけるアンケートでは、作業療法学生の学力や社会性の低下、人としての成熟度の低い学生の増加が指摘されている⁶⁾。この問題を解決するためには、人格形成の基本となる向社会的行動や愛他行動などの思いやり行動がどのように引き出されるかを知ることが重要であると考えられる。大野ら⁷⁾は、大学1年生と3年生の作業療法学生を対象に、社会活動経験の有無が思いやり行動に及ぼす影響を検討している。その結果、募金などの思いやり行動は、アルバイト、部活、ボランティアといった社会活動を経験したことのある学生が、全く経験したことのない学生に比べ多いことが示された。このことは、社会活動が思いやり行動を促進している可能性を示している。

一方で、永田ら⁸⁾は、看護系と非医療職の女子学生に対し、学年の進行によって、思いやりに近い概念である「博愛」への動機づけがどのように変化をするかを調査している。その結果、看護学生は学年の進行に伴い「博愛」が有意に低下するが、非医療系の学生には変化はみられなかった。また、学年の進行とともに博愛が低下するという結果は、医学生についても報告されている⁹⁾。学年の進行に伴う「博愛」の減少の原因として、永田ら⁸⁾は明確な理由は不明としながらも、臨床実習を含んだ教育システムにあるのではないかと述べている。

臨床実習は、学生が大学という場から離れ、職業人になるために行う社会経験の一つである。医

学生や看護学生を対象とした調査では、臨床実習の経験により思いやり行動が減少することを示唆した結果が示されているが、この結果が作業療法学生でも得られるとは限らない。我々は、臨床実習によって、学生は様々な人間関係の中から人と人が関係することの大切さを学び、思いやり行動の生起へとつながっていくと考える。

従って本研究では、授業カリキュラムに長期の臨床実習が組み込まれていない学生と長期の臨床実習が前後に組み込まれている学生の思いやり行動の変化を比較することにより、長期の臨床実習経験が思いやり行動に与える影響について検討するものである。

方法

1. 対象

研究の趣旨を説明し同意を得た本学リハビリテーション学科作業療法専攻の学生とした。第1回のアンケート有効回収率は88.3%であり、第2回の回収率は87.4%であった。第1回の調査対象者は平成X年度1年次生40名、3年次生51名であり、第2回の調査対象者は平成X+1年度2年次生39名、4年次生51名であった。

以下、平成X年度1年次生及び平成X+1年度2年次生はA期生とし、平成X年度3年次生及び平成X+1年度4年次生はB期生と記す。

2. 調査の概要

学生の意識調査として調査の趣旨を説明した文書を添付し、無記名の質問紙による調査を実施した。

3. 調査実施時期

第1回調査は、平成X年5月に実施した。その後、A期生は講義形式の専門科目と見学実習を中心としたカリキュラムが実施された。B期生は講義形式の専門科目と臨床実習を中心としたカリキュラムが行われた。4年次には学外で行う長期の臨床実習があり、平成X+1年3月より、2週間を1期間とした実習が2施設で行われた。その後、5

月より2か月間を1期間とした実習が2施設で実施された。臨床実習施設は約80施設におよび、1施設につき1～3名で実習が行われ、身体障害、精神障害、老年期、発達障害の領域の中から経験するようになっている。第2回調査はこの長期の臨床実習終了直後の平成X+1年9月に実施した。

4. 調査の内容

1) 愛他行動尺度

Rushtonら¹⁰⁾のself-report altruism scaleを日本語訳したものをを用いた(表1)。20項目で構成されており、5件法で回答を求めた。得点が高いほど愛他行動が強いことを示す。

2) 向社会的行動尺度(大学生版)

菊池¹¹⁾が、Rushtonらの愛他行動尺度を参考に、大学生用に改変した尺度を用いた(表2)。20項目で構成されており、5件法で回答を求めた。得点が高いほど向社会的行動が強いことを示す。

3) 思いやりアンケート

第2回調査時のみ実施した。第1回時と比較し、現時点で他者に対する思いやりが減少したか増加したかについての主観的な判断をさせた。この点数を主観的な思いやりの変化とした。1～5の5段階で、1は最も減少、3は変化無し、5は最も増加を示す。3以外を選んだものに対しては、その理由についても記載させた。

4) 臨床実習についてのアンケート

第2回調査時のみ実施した。対象はB期生とした。実習に対する満足度を1～5の5段階で質問し、1は最も不満足、3は普通、5は最も満足を示す。項目は、実習を総合しての満足度、患者との関係性に対する満足度、実習指導者との関係性に対する満足度とした。

5) データ分析方法

愛他行動尺度と向社会的尺度は第1回調査と第

表1 愛他行動尺度

項目
1) 見知らぬ人の車が脱輪していたため、側溝から出すを手伝った。
2) 見知らぬ人に道を教えた。
3) 見知らぬ人にお金をくずしてあげた。
4) 赤い羽根や緑の羽などの募金に応じた。
5) 見知らぬ人にお金をあげた。
6) 慈善事業に品物や衣類を寄付した(福祉団体などに)。
7) ボランティアの仕事をした。
8) 献血をした。
9) 見知らぬ人の持ち物(本や荷物など)を持ってあげた。
10) 見知らぬ人にエレベーターのドアをおさえて先に乗せてあげた。
11) 列に並んでいて(コピー、スーパーなどで)他人の順番をゆずった。
12) 見知らぬ人を車で拾ってあげた。
13) (銀行やスーパーなどで)店員がお金を間違えたときに、自分に有利な場合にもそれを正してあげた。
14) あまり親しくない隣人に大切なもの(皿とか道具など)を貸した。
15) 「慈善事業」のグッズをその趣旨を知っていてすすんで買った。
16) 自分の方がよく知っている場合にはあまり親しくない友人でも宿題を手伝ってあげた。
17) 近所の人の宅配物やペットや子供をただで預かった。
18) 障害者やお年寄りが道を横切のを手伝った。
19) バスや列車で立っている人に席をゆずった。
20) 知り合いの引っ越しを手伝った。

表2 向社会的行動尺度

項目
1) 列に並んでいて、急いでいる人のために順番をゆずる。
2) お店で、派されたおつりが多い時、注意をあげる。
3) 転んだ子供を起こしてあげる。
4) あまり親しくない友人にもノートを貸す。
5) 気持ちの悪くなった友人を、保健室などに連れていく。
6) 友人のレポート作成や宿題を手伝う。
7) 列車などで相席になったお年寄りの話し相手になる。
8) 気持ちの落ち込んだ友人に電話したり、メールをしたりする。
9) 何か探している人には、こちらから声をかける。
10) バスや列車で立っている人に席をゆずる。
11) 酒に酔った友人の世話をする。
12) 雨降りのとき、あまり親しくない友人でも傘に入れてあげる。
13) 授業を休んだ友人のために、プリントをもらう。
14) 家族の誕生日や母の日などに家に電話したりプレゼントをしたりする。
15) 見知らぬ人がハンカチなどを落としたとき、教えてあげる。
16) 知らない人に頼まれてカメラのシャッターを押してあげる。
17) バスや列車で、荷物を網棚のせてあげる。
18) 知らない人が落として散らばった荷物を、いっしょに集めてあげる。
19) けが人や急病人が出たときに介抱したり救急車を呼んだりする。
20) 自動販売機や切符売機などの使い方を教えてあげる。

2回調査の間で、主観的な思いやりの変化については両学年の間で、マンホイットニーのU検定を用いて比較した。思いやりの変化と実習に対する満足度との間には、スピアマンの順位相関係数を求めた。有意水準は5%未満として検討を行った。

結果

1. 主観的な思いやりの変化

A期生の、主観的な思いやりの変化は 3.74 ± 0.12 (平均値 \pm 標準誤差)であり、増加したと感じている学生がほとんどであった。その理由として「友人との関係が影響した」、「アルバイトによる経験が影響した」「臨床実習の経験が影響した」という回答が多かった(図1)。自由記述の意見としては、「新しい出会いの中で他者の存在を実感し、広い視野を持つ必要性を感じた」、「家族について、一人暮らしをして大切さに気付いた」などといった意見がみられた。

B期生の、主観的な思いやりの変化は 3.61 ± 0.11 であり、増加したと感じている学生がほとんどであった。その理由として「臨床実習の経験が影響した」、「友人との関係が影響した」、「家族との関係が影響した」という回答がみられた(図1)。自由記述の意見としては、「臨床実習では患者と

関わり、患者の気持ちを考える機会が多くあった」、「たくさんの人と関わっていく中で、協調性を学び相手のことを考えるようになった」などといった意見がみられた。

思いやりの変化について、A期生とB期生の間で有意な差は認められなかった。

2. 主観的な思いやりの変化と臨床実習の満足度の関係

B期生の臨床実習の総合満足度は 3.43 ± 0.14 、患者との関係の満足度は 3.96 ± 0.11 、臨床実習指導者との関係の満足度は 3.53 ± 0.14 であった。主観的な思いやりの変化と臨床実習の満足度の間には、軽度の有意な正の相関が示された($\rho=0.29$, $p<0.05$, $n=51$)。思いやりの変化と臨床実習指導者との関係では、軽度の有意な正の相関が示された($\rho=0.30$, $p<0.05$, $n=51$)。思いやりの変化と患者との関係では有意な相関は認められなかった。

3. 第1回調査と第2回調査の愛他性行動尺度の変化

A期生では、第1回調査時については、合計点は 40.1 ± 1.43 であり、第2回調査時は 41 ± 1.21 であった(図2)。第1回調査時と第2回調査時の合計点の間に有意な差は認められなかった。

B期生については、第1回調査時で合計点は39.41

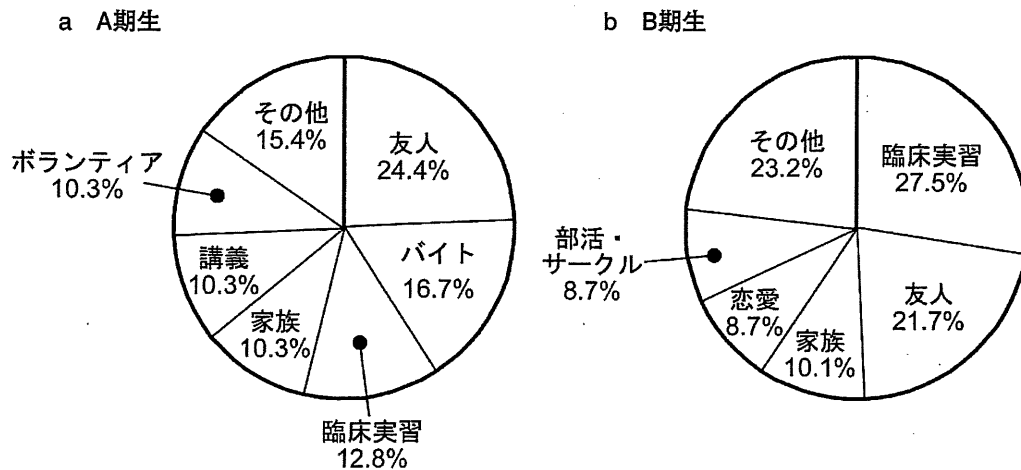


図1 思いやりの変化に影響する要因。A期生(n=39)、B期生(n=51)。

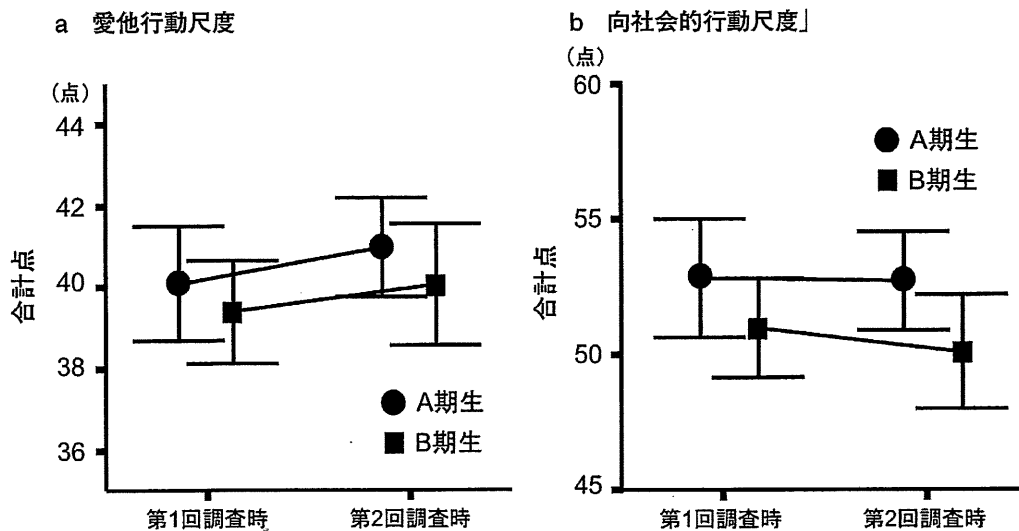


図2 学年の進行に伴う愛他行動及び向社会的行動の変化。第一回調査時（A期生、n=40；B期生、n=51）と第二回調査時（A期生、n=39；B期生、n=51）の合計得点を、平均値±標準誤差で示す。

±1.27、第2回調査時で合計点は40.08±1.5であった（図2）。第1回調査時と第2回調査時の合計点の間に有意な差は認められなかった。

4. 第1回調査と第2回調査の向社会的行動尺度の変化

A期生については、第1回調査時の合計点は52.83±2.23であり、第2回調査時では、合計点は52.74±1.83であった（図2）。第1回調査時と第2回調査時の合計点の間に有意な差は認められなかった。

B期生については、第1回調査時では、合計点は51±1.83であり、第2回調査時では50.14±2.11であった（図2）。第1回調査時と第2回調査時の合計点の間に有意な差は認められなかった。

考察

1. 学年の進行に伴う主観的な思いやりの変化

思いやり行動が生じる過程には、「援助を必要とする対象者に出会う」、「思いやりの心が生じる」、「思いやり行動が生じる」の3つが考えられる¹²⁾。しかし、援助する対象者に出会っても、その人の要求が理解できなければ思いやり行動につながらない¹¹⁾。また、思いやり行動を引き起こす

要因は、「思いやりなどの感情的側面」だけではなく、「その行動をとることで受ける利益や損失などを見積もる認知的側面」がある。さらに、実際に思いやり行動を行おうとしても、時間経過の中で相手の状況が変化し、助けが不要となることもあり、思いやり行動が生起しないことも起こりうる。Eisenberg¹³⁾は、この過程について向社会的行動モデルを用いて説明し、思いやり行動は、第1に「他者への要求の注意の段階」、第2は「動機付け段階」、第3は「意図と行動のつながり」という過程を経て生起すると述べている。植村¹⁴⁾は、理想的な形としては、助けが必要な人に対し、思いやりが生じることが動機となり、思いやり行動が生まれることとしている。

日常生活の中で、援助を要す対象者に出会う機会はあり、その中で他者の要求について感じ取り、行動に移す経験を積むことは可能である。この経験に加え、B期生は4年次のカリキュラムとして、長期の臨床実習で障害を抱えた患者と接する機会が多いという点で、思いやりの気持ちや思いやり行動が生じやすくなると考えられる。そこで、学年が進行することによる他者に対して思いやりの

増減をアンケートにて調査したところ、A期とB期共に、思いやりの気持ちは増加したという回答が多数を占めた。

その理由として、B期生では、臨床実習を挙げる者が最も多く、続いて友人関係、家族関係という順の回答となった。臨床実習については、患者や医療従事者など他者との関わりの幅が広がったことを理由に挙げる者が多かった。A期生では、友人関係を挙げる者が最も多く、続いてアルバイト、臨床実習という順の回答となった。1年次は、大半の学生が親元を離れて一人暮らしを始め、大学で友人を作り、アルバイトで社会に触れ、2年次はこれらの環境の変化に慣れていく時期である。

A期生とB期生の間で、思いやりの増加の理由で共通してみられたのが、臨床実習と友人関係であった。臨床実習について、B期生については、臨床実習指導者の指導の下、援助を必要とする対象者に会う機会に恵まれ、実際に治療的介入を行う体験をしている。この過程の中で、共感性が養われたのかもしれない。A期生についても、隣接する附属病院で見学実習を行うことが、障害を抱えた方々と接する貴重な経験となったと考えられる。現代青年の向社会的行動を行う対象は友人に多いという報告がされている¹⁴⁾。さらに、青年期の発達の特徴として親密な友人関係を形成することが知られており^{14) 15)}、A期とB期の学生共に、友人関係が理由として多いのは、これらの報告を支持していると考えられる。

理由としてB期生で臨床実習が多く、A期生でアルバイトが上位にあったのは、授業カリキュラム上の問題であると考えられる。B期生は、長期の臨床実習があり、生活の経験のほとんどが、臨床実習を中心に成立している。一方でA期生は、講義が主体であり、多くの学生がアルバイトを行っている。アルバイトは、学生ではなく社会人として行動する必要がある、共感性を養う場となっているかもしれない。

我々の仮説は、長期の臨床実習を経験したB期生

は、A期生に比べて思いやりの気持ちが増加するというものであるが、今回の手法ではこの点まで検討することはできなかった。この点を検討するためには、思いやりの気持ちの調査項目を増やし、変化を前後比較する手法が望ましいと思われる。

2. 主観的な思いやりの変化と臨床実習の満足度の関係

小山ら¹⁶⁾は、言語聴覚士を目指す学生に対し、臨床実習から学んだことを調査したところ、人との接し方や人間関係と回答する学生が最も多かったと報告している。思いやりの生起には、まず援助を要す対象者と出会うことから始まる¹²⁾。臨床実習は、援助を要す患者と出会う機会が多く、援助についての方法論まで学ぶ場でもあるため、思いやりの気持ちの増減に影響を与えるはずである。また、患者や臨床実習指導者との関わりが、臨床実習に対する満足度や達成度に影響を与えているという報告がされている¹⁷⁾。臨床実習が他者との接し方について学ぶ場であれば、実習や患者及び臨床実習指導者との人間関係についての満足度が増加すると、思いやりの気持ちが増えたという実感も増加すると考えられた。従ってこの点について検討したところ、思いやりの変化と臨床実習の満足度、思いやりの変化と臨床実習指導者との関係で、軽度の有意な正の相関が示された。

臨床実習指導者との関係が良好であれば、学生が症例と関わる際に援助が受けやすく、患者との関係も築きやすい。原田¹⁷⁾は、患者との関係を築く上で、困難な状況においては臨床実習指導者や教員の支持的な態度や指導・助言が必要であると述べている。反対に、患者との関係が良好であっても、患者が学生と臨床実習指導者との間に入り、支持的な対応をしてくれることは考えられない。今回、臨床実習と思いやりの変化、臨床実習指導者との関係と思いやりの変化については有意な相関関係が示されたのにも関わらず、患者との関係については有意な相関関係が認められなかったのは、そのような構図が影響したのでないかと考え

られた。臨床実習に満足しているということは、患者及び臨床実習指導者との関係も良好であったと考えられる。従って、臨床実習の満足度と思いやりに有意な相関関係が認められたと考えられる。

本研究で、臨床実習での経験が、思いやりの気持ちの育成に関与することが示された。しかしながら、臨床実習の満足度や臨床実習指導者との関係の満足度では、有意な相関こそ示されたものの、軽度の正の相関であり、臨床実習以外の他の要因も関係していると考えられる。今後は、この点について検討していく必要がある。

3. 愛他性行動尺度及び向社会的行動尺度の変化

愛他行動尺度の中には、文化の違いから日本の青年が日常生活において想定しにくい場面を質問した項目があることが指摘されている¹⁸⁾。そのため、総合得点が向社会的尺度より低くなる。愛他行動尺度と向社会的行動尺度は正の相関を示すことから、両尺度を区別して捉えるよりも、思いやり行動という行動全般を調査していると考えたほうが良いと言われている¹⁸⁾。

本研究では、Rushtonら¹⁰⁾の愛他行動尺度及び菊池¹¹⁾の向社会的行動尺度を用いて、学年が進行することによる思いやり行動の変化について調査した。その結果、我々は、B期生において、臨床実習の経験により、思いやり行動の出現頻度が増えると予想したが、A期生とB期生ともに、学年の進行による愛他行動や向社会的行動尺度の合計点に有意な差は認められなかった。この点について、本研究が無記名による調査方式であったため、対応のないグループ間での比較となり、各個人の変化に対応させて比較できなかったことも原因の一つかもしれない。

学生は、学年の進行に伴い、思いやりの気持ちが増加したと感じている者がほとんどであったが、その割に思いやり行動に結びついていなかった。その理由として、前述したEisenberg¹³⁾の向社会的行動モデルが示すように、思いやり行動が生起する過程が単純ではないことが挙げられる。坂井³⁾

は、この点について、他者を思いやる能力はあり、適切な援助スキルを有しても、行動につながらないことがあることを指摘している。思いやり行動を抑制する要因として、自分以外にも手を差し伸べる他者の存在、自分が行動することが不適切であるという思いこみ、自分の行動に対する他者の評価などが挙げられる。また現代の若者の特徴として「相手の心の中に土足で入り込むようなことはしたくないので何も尋ねない」など相手のために思って行動に移さない人が増えていることが指摘されている³⁾。従って、本研究においても、思いやりの気持ちの増加に、思いやり行動が結びつかないという結果は、現代の若者の思いやりに対する考え方を反映しているのかもしれない。坂井³⁾は、相手のことを思いやった上で行動に移されなかった思いやりもまた必要であると述べている。

一方で、思いやりの感情を抱いても、社会的スキルが低いために、どのように表出していいかわからず、思いやり行動が出現しないという報告もある^{3) 11)}。臨床実習の経験は、社会的スキルの向上にまでには至らないという報告もあり^{19) 20)}、臨床実習を経験したB期生がA期生と変わらない結果になったのも、社会的スキルが両者で大きくは変わらないことを示唆しているのかもしれない。また、現代の若者は精神的にも時間的にもゆとりがなく、他者をいたわる余裕がなくなっているという報告もある¹⁴⁾。B期生において、思いやり行動に変化がみられなかったのは、臨床実習において、精神的にも肉体的にも余裕がない状態であり、援助を必要とする対象者に出会っても、実習生としての義務から援助することはあっても、自発的に愛他的に手助けを行うゆとりがなかったということも考えられる。

本研究では、思いやりの気持ちが、思いやり行動になぜつながっていないのかについてまで検討することはできなかった。今後は、行動化されなかったから思いやりがないのではなく、行動化しないという選択をした可能性があることを念頭

におき、行動化されない思いやりと社会的スキルの未熟さによる思いやり行動の減少という2つの側面から、検討を進めていく必要があるだろう。

まとめ

本研究では、A期生とB期生が学年の進行によって、主観的な思いやりや思いやり行動にどのような変化をもたらすか調査した。その結果、両者共に、学年の進行により思いやりが増加したと感じていることが明らかとなった。その理由として、A期生は臨床実習・友人関係・家族関係を、B期生は友人関係・アルバイト・臨床実習を挙げている。両者では取り巻く環境に違いはあるものの、他者との関わりが相手の立場や気持ちを考えさせる点では共通している。

A期生とB期生は、思いやりの気持ちは生じていたようだが、思いやり行動が出現するまでは至らず、学年の進行によってA期とB期生ともに愛他行動尺度と向社会的行動尺度の得点に有意な差は認められなかった。その理由として、行動に出現しない思いやりの存在や社会スキルの低さなどが考えられるが、本研究では明らかにすることはできなかった。この点については、今後適切な思いやり行動とは何かも含めて、詳細に検討される必要があるだろう。

文献

- 1) 中里至正, 松井洋: 異質な日本の若者たち-世界の中高生の思いやり意識-. プレーン出版, 東京, 1997.
- 2) 高木邦子: 特集臨床実習再考-現代の学生気質とその対応. -OTジャーナル45 (4), 320-325, 2011.
- 3) 坂井玲奈: 思いやりに関する研究の展望と概観-行動に表れない思いやりに注目する必要性の提唱-. 東京大学大学院教育学研究科紀要45, 143-148, 2005.
- 4) 江口知子, 安里勝人, 川島一夫: 貸与行動における向社会的判断と愛他的判断. 信州大学教育学部紀要108, 91-99, 2003.
- 5) 杉村僚子: 発達障害をもつ子供の向社会的行動に関する研究動向-広汎性発達障害を中心に-. 東北大学大学院教育学研究科研究年報57 (2), 239-254, 2009.
- 6) 池田望, 酒井ひとみ, 太田篤志, 岸田和子, 腰原菊恵, 他: 養成教育に関するアンケートおよび第一回教育問題検討会報告. 作業療法26 (5), 514-520, 2007.
- 7) 大野宏明, 土屋景子, 井上桂子: 学生の社会活動が性格特性に与える影響-第一報-. リハビリテーション教育研究18, 89-90, 2013.
- 8) 永田博, 武内信子, 小川節子: 看護学生における対人関係価値の学年変化-看護系高校生と非看護系大学生による検討-. 看護展望17 (12), 1420-1428, 1992.
- 9) Gordon LV, Mensh IN: Values of medical students at different levels of training. Journal of Educational Psychology 53 (1), 48-51, 1962.
- 10) Rushton JP, Chrisjohn RD, Fekken GC: The altruistic personality and the self-report altruism scale. Personality and Individual Differences 2(4), 293-302, 1981.
- 11) 菊池章夫: 思いやりを科学する-向社会的行動の心理とスキル-. 川島書店, 東京, 1988.
- 12) 杉村健: 学生における思いやりのところと行動. 奈良教育大学教育研究所紀要32, 113-118, 1996.
- 13) Eisenberg N: Altruistic emotion, cognition, and behavior. Lawrence Erlbaum Associates, Hillsdale, NJ, 1986.
- 14) 植村里絵: 向社会的行動の生起過程に関する探索的研究. 名古屋大学教育学部紀要. 心理学46, 173-185, 1999.
- 15) 菊池章夫, 堀毛一也, 斎藤耕二, 二宮克美・編著: 社会化の心理学/ハンドブック: 人間形成への多様な接近. 川島書店, 東京, 2010.
- 16) 小山美恵, 山崎和子, 長谷川純, 玉井ふみ, 吉畑博代, 他: 言語聴覚士を目指す学生の臨床実習経験-アンケート結果の検討-. 人間と科学: 県立広島大学保健福祉学部誌 8 (1), 67-77, 2008.
- 17) 原田秀子: 臨地実習における学生の達成感に影響する要因の分析 (第3報) -4年次学生に対しての縦断調査を通して-. 山口県立大学看護学部紀要

- 10, 29-37, 2006.
- 18) 嶋野重行, 菅原正和, 大浪瑠夏: 時間的展望が向社会的行動に与える影響. 岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要2, 133-140, 2003.
- 19) 安部征哉, 元村直靖: 作業療法学生の臨床実習における社会スキルについての検討 - Kiss-18を活用して -. 大阪教育大学紀要第III部門57 (1), 41-47, 2008.
- 20) 田中真一, 古島由紀, 村田伸, 梅井凡子: 実習前後におけるシャイネス感情と社会的スキルの変化について-有資格者と比較して-. 理学療法科学25 (3), 413-417, 2010.